

令和4年度 報告書

乙立里家診療所における
地域医療臨床教育研究及び
出雲市における地域住民の
健康増進と医療充実に関する研究

目次

共同研究の概要	1
1. 研究開始当初の背景	2
2. 研究の目的	
3. 研究の方法	
① 乙立里家診療所実習	
② 健康増進および生活習慣病の予防や病態解明に関する研究	3
4. 研究成果および業績（論文・学会発表など）	4
5. 地域コミュニティを活性化する医療人材の育成に関する研究	12

共同研究の概要	
研究題目	乙立里家診療所における地域医療臨床教育研究及び出雲市における地域住民の健康増進と医療充実に関する研究
研究の目的	出雲市乙立里家診療所を島根大学医学部附属病院のサテライト診療所として位置づけ、医学部学生のクリニカル・クラークシップの一環として診療所臨床教育研究を行い、地域医療教育に貢献するとともに、地域コミュニティを活性化する医療人材を育成し、そして、出雲市における地域住民の健康増進と医療充実に関する研究を共同で実施する。
研究の内容	<p>1.出雲市の地域医療を担う人材の確保と地域定着を促進するための医学教育・人材育成のあり方に関する研究；乙立里家診療所実習をモデルとした成果基盤型教育についての研究</p> <p>2.出雲市における地域住民の健康増進及び生活習慣病の予防や病態解明に関する活動に関する研究</p> <p>3.地域コミュニティを活性化する医療人材の育成に関する研究</p>
研究期間	令和4年4月7日 から 令和5年3月31日まで
共同研究に従事した職員等	<p>医学部内科学講座(内科学第二) 石原 俊治 教授</p> <p>医学部内科学講座(内科学第一) 金崎 啓造 教授</p> <p>医学部内科学講座(内科学第三) 長井 篤 教授</p> <p>医学部総合医療学講座 牧石 徹也 教授</p> <p>医学部附属病院内分泌代謝内科 四方田 美和子 医科医員</p> <p>医学部附属病院内分泌代謝内科 鬼山 佳祐 医科医員</p> <p>医学部附属病院消化器内科 大滝 聡美 医科医員</p> <p>医学部附属病院消化器内科 大町 泰介 医科医員</p> <p>医学部附属病院消化器内科 木下 泰仁 医科医員</p> <p>医学部附属病院消化器内科 長谷川 修明 医科医員</p> <p>医学部附属病院脳神経内科 松本 源樹 医科医員</p> <p>医学部附属病院脳神経内科 大森 直樹 医科医員</p> <p>医学部附属病院脳神経内科 鈴木 知子 医科医員</p> <p>医学部附属病院脳神経内科 高野 育子 医科医員</p> <p>医学部附属病院脳神経内科 宮島 伸枝 医科医員</p>

1. 研究開始当初の背景

出雲市乙立里家診療所は島根大学医学部の地域医療の実習の場として、これまで多くの学生たちが学んできた。実習に際しては、本診療所を附属病院のサテライトとして位置づけ、各内科の医師が指導医として医学部生と共に現地に赴き、クリニカル・クラークシップの一環として診療所臨床教育研究を行い、地域医療教育に貢献するとともに、地域コミュニティを活性化する医療人材を育成し、そして、出雲市における地域住民の健康増進と医療充実に関する研究を実施してきた。また、健康増進と医療充実という観点から、本研究に関わる各内科学講座において、様々な成人病における病態研究も合わせて推進してきた。

2. 研究の目的

以下の3点を目的として本研究を遂行する。

- ① 出雲市の地域医療を担う人材の確保と地域定着を促進するための医学教育と人材育成のあり方について、指導医と医学生による乙立里家診療所実習をモデルとした成果基盤型教育に関する研究をおこなう。
- ② 出雲市における地域住民の健康増進および生活習慣病の予防や病態解明に関する研究をおこなう。
- ③ 地域コミュニティを活性化する医療人材の育成に関する研究をおこなう。
* ③の研究目的、方法、結果については12ページ以降で報告する。

3. 研究の方法

① 乙立里家診療所実習

島根大学医学部附属病院のサテライト診療所と位置づけた出雲市乙立里家診療所へ、大学病院医師(指導医)と医学科6年生を週3回派遣し、外来診療を通じて医学生の診療参加型臨床実習をおこなう。指導医の担当曜日は、下記の通りである。

火曜日:内科学第一講座(内分泌代謝内科)

水曜日:内科学第三講座(脳神経内科)

木曜日:内科学第二講座(消化器・肝臓内科)

医学科6年生が上記の3科の臨床実習期間中に診療所実習に参加した(医学科6年次の臨床実習は選択制であり、各科の実習を選択した医学生が本実習に該当する)。医学生は「地域医療の重要性を理解できたか」、「今後の勉学に励みになったか」、「指導は適切であったか」という3点について自己評価した。また、指導医の医学生に対する評価は、「実習態度」「医療面接」「身体診察」「臨床推論」の4項目を設定し、各項目について指導を担当した医師によって評価した。実習の事務局は地域医療教育学講座に置き、本研究の結果の解析などをともにおこなった。

② 健康増進および生活習慣病の予防や病態解明に関する研究

内科学第一講座(内分泌代謝内科)、内科学第二講座(消化器・肝臓内科)、内科学第三講座(脳神経内科)の専門領域において、臨床的・基礎的研究を計画し、成果を発表することとした(詳細な研究内容については後述)。

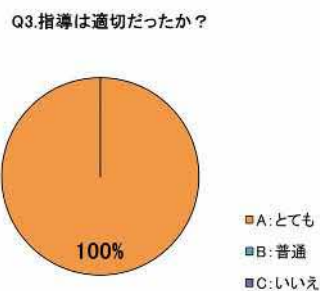
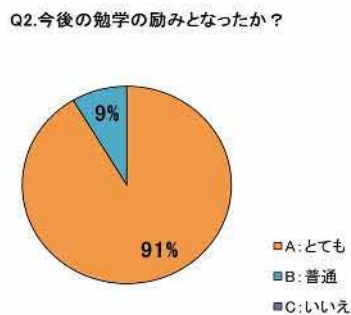
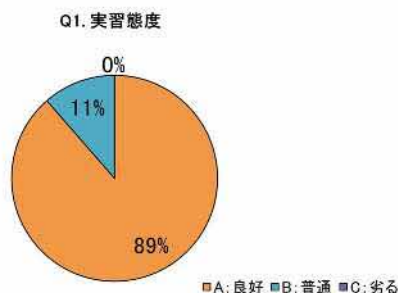
4. 研究成果および業績(論文・学会発表など)

① 乙立里家診療所実習

医学生による自己評価(「地域医療の重要性を理解できたか」、「今後の勉学に励みになったか」、「指導は適切であったか」という3点の結果を図に示す(回答数 35)。34人の医学科6年生が参加した。ほとんどの学生が本実習への参加について満足し、その意義を感じていた。

<学生の感想・意見>

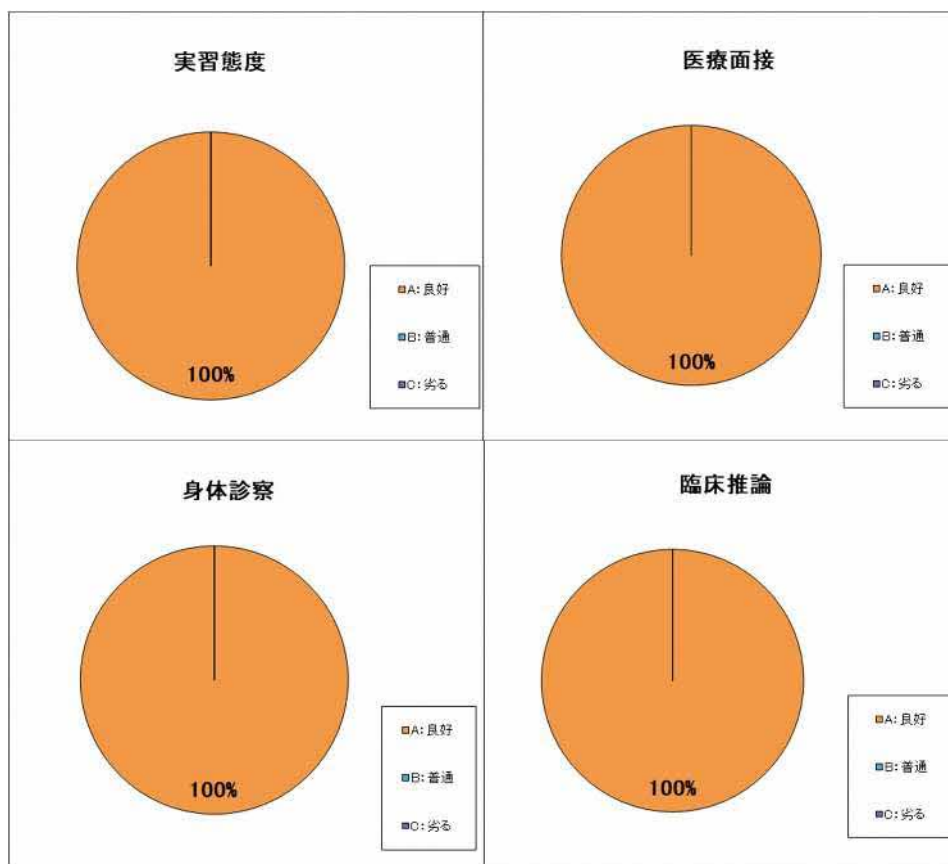
- ・ 間近で色々な患者さんの診察を見学できてよかったです。
- ・ 大学病院とは違い、かなり落ち着いておられる患者さんが多い印象を受けました。また、生活の都合をおっしゃる方もおられて、医療が生活に影響を与えていると感じました。
- ・ 実際の診療所の様子がみれて良かったです。先生から色々な話が聞けてよかったです。
- ・ 診療所の様子を見ることができました。
- ・ 認知機能が低下されている患者さんの希望や受信状況の確認、必要に応じて診療所から連携する様子を見ることができて”地域医療”を肌で感じました。様々なプロブレムを抱えている方が多く、小さな変化にも注目していく必要性を感じました。
- ・ 大学病院での外来とは異なり、必ずしも明確な主訴のない患者さんのお話を宮島先生が丁寧に傾聴されていて、その姿勢が大変参考になりました。根気強く話を伺うことが大切だと改めて感じた。
- ・ 患者さんの診察に関わるととても勉強になりました。すぐに検査がでない環境も大学ではないので勉強になりました。



- ・ 大学病院とは異なる診療を見学させていただくことができました。より患者さんと近い距離で接することができても勉強になりました。ありがとうございました。
- ・ 採血実習もやらせていただき、身になる実習となりました。患者さんに対して血圧測定をしました。ありがとうございました。
- ・ 丁寧に指導をしていただき、勉強になりました。長期の管理がみれて良かったです。聴診や採血も勉強出来ました。
- ・ 地域医療を学ぶことができました。
- ・ 地域医療の重要性を実感しました。
- ・ 検査の必要性など大学とは違った学びがありました。
- ・ 住んでいる地域でできる範囲、疾患のコントロールができるということは患者さんにとっても負担が少ないですし、島大などとも連携が取れて良いなと思いました。
- ・ 地域医療におけるフォローの様子などを見学することができました。
- ・ 地域の診療所で患者さんに必要とされている様子が分かりました。外来診察の様子が勉強出来ました。血圧測定もやらせていただきました。
- ・ 臨床に役立つ知識をいろいろと指導して頂き大変勉強になりました。ありがとうございました。
- ・ 血圧測定の練習ができて勉強になりました。
- ・ 診療所ならではの患者をみることができ、また BP 測定の練習もすることができた。
- ・ 大学病院では見られない日常的な疾患を、また診療所という地域に密着した場所でみることでできて、為になった。
- ・ 血圧と聴診器を使って測定するのは久々だったので、うまく測定できないときもありましたが良い経験になりました。
- ・ 地域医療を学ぶことに加えて、年齢が近く、同性の先生のお話を聞くことができました。進路や将来のことで不安や迷いが多かったので、とても為になりました。ありがとうございました。
- ・ 生活習慣病を身近に感じる事ができたと思います。薬の名前がたくさん出てきて、覚えられたらいいなと思いました。
- ・ 経過のフォローや薬の調整などを見ることができました。大学よりも common な疾患をたくさん見れてよかったです。
- ・ 大学病院とは違う診療所での様子を知ることができました。
- ・ エコーをあてられたのがよかった。
- ・ 丁寧にエコーを教えてもらえてよかったです。
- ・ 島根県の地域医療について実習することができても勉強になりました。診療所では様々な疾患の患者さんを診ることができ、総合的に診察する知識がつかえました。ありがとうございました。
- ・ 血圧測定や採血の練習など積極的に手技をさせていただき勉強になりました。

- ・ 聴診法での血圧測定を久しぶりに実習しました。大学とは違う限られた条件での実習は勉強になりました。この診療所の医療圏がどのあたりの人をカバーされているのか、揃っている検査・器具などが気になりました。
- ・ 今日も見学させていただいてありがとうございました。
- ・ 大学で見学するのはまた異なる診療やその雰囲気を知ることができ良かったです。ありがとうございました。
- ・ 患者さんの診察に同行し、身体診察等を対応させていただきました。病棟実習での手技やマネジメントを活かせたと思います。

<指導医の評価>



「実習態度」、「医療面接」、「身体診察」、「臨床推論」の4項目について指導を担当した医師が評価した。指導医の学生に対する評価は極めて良好であり、地域医療の現場で医学生たちが指導医の下で適切な医療体験が行われたことを示す結果であった(図:回答数 31)。

<指導医の感想・意見>

- ・ 意欲的に取り組んでおられました。
- ・ 積極性をもって実習に取り組んでおられました。
- ・ とても熱心で臨床推論、鑑別もしっかりされていました。これからも頑張ってください。
- ・ 国試もがんばってください。
- ・ 意欲的に取り組んでおられました。

- ・ 丁寧診察されていました。ぜひ内分泌代謝疾患の診療をたのしんでください。
- ・ 丁寧診察してくれました。ぜひ内分泌代謝疾患の診療をたのしんでください。
- ・ 熱心な学生さんでした。
- ・ 熱心な学生さんでした。
- ・ 血圧測定、身体診察等積極的に参加していました。お疲れさまでした。
- ・ はっきりとして口調で患者さんとお話されていました。身体診察もしっかりしてもらいました。
- ・ 非常に積極的に見られました。
- ・ 熱心に取り組んでくれました。お疲れさまでした。
- ・ 血圧測定など積極的に参加していました。お疲れさまでした。
- ・ お疲れさまでした。
- ・ お疲れさまでした。
- ・ 国試もがんばってください。
- ・ 非常に頑張っていると思います。これからも頑張ってください。
- ・ 血圧測定、診察ともやってもらい良かったです。しっかりできていました。
- ・ 血圧測定、診察ともやってもらい助かりました。しっかりできていました。
- ・ 鑑別をあげたり診察をしてもらいました。採血練習もしました。
- ・ 鑑別をあげたり診察をしてもらいました。採血練習もしました。
- ・ 国試もがんばってください。
- ・ とても熱心に取り組んでいただきました。
- ・ とても熱心に取り組んでいただきました。
- ・ 血圧測定や問診、身体診察等、丁寧に行っていただきました。お疲れさまでした。
- ・ 積極的に診察に参加してくれました。
- ・ 積極的に診察に参加してくれました。
- ・ 熱心に参加しておられ、好印象でした。
- ・ 国試もがんばってください。
- ・ 診察・バイタル測定をしてもらいました。適切にできていました。

② 地域住民の健康増進および生活習慣病の予防や病態解明に関する研究

◆ 内科学講座第一(内分泌代謝内科)

➤ 無秩序な高インスリン血症の回避

高インスリン血症・インスリン抵抗性を呈する2型糖尿病症例では心・腎予後に対してハイリスクであることが知られている。高インスリン血症は低血糖、低ケトン血症など代謝面への影響、交感神経活性化やナトリウム貯留といった多様な負の影響がある。臨床現場において、糖尿病治療の観点から高インスリン血症はやむなく許容される傾向にあるが、実際には高血糖は正により得られる有益な影響を、無秩序な高インスリン血症により相殺してしまう可能性もある。当科では無秩序な高インスリン血症を惹起しない糖尿病診療を念頭に様々な検証を現在行っている。

➤ インスリン抵抗性と周産期合併症

インスリン抵抗性・高インスリン血症と周産期合併症における相関は以前より知られてきたが環境因子・人種差などの影響は明らかではない。約 600 人程度の妊婦糖負荷試験データと周産期合併症の発症頻度を解析したところ、インスリン抵抗性と周産期合併症の発症に関して食生活・環境・遺伝素因の影響が非常に大きい可能性が明らかとなった。2022 年 10 月の糖尿病合併症学会で第一報¹⁾を、2023 年 5 月の日本糖尿病学会総会で発表する(伊藤郁子 修士論文²⁾)。

➤ 微量元素と耐糖能異常・高血圧の発症

当科ではマグネシウム欠乏が演じる病的意義に関して解析を進めており、マグネシウム欠乏と塩分感受性高血圧の関連を報告した。また、マウスにマグネシウム欠乏食を投与すると、無秩序なインスリン分泌を伴う高血糖かつ低血糖が生じ、糖代謝が破綻する可能性が示された。また背景に、低マグネシウム血症はインスリン代謝に影響を及ぼす可能性が示唆された。また SGLT2 阻害薬投与の前ではより血中マグネシウム濃度が上昇することも見出し、そのようなマグネシウム濃度の変動が糖代謝やその他の調節ホルモンの制御に与える影響に関して現在解析を始めている。

➤ アシドーシスと細胞老化の関連

老化、インスリン抵抗性、糖尿病、腎臓病はアシドーシスを惹起する。細胞外アシドーシス環境下で誘導されるグルタミン代謝酵素(GLS)が尿細管細胞老化惹起に重要な事、種々の化合物による GLS 抑制が細胞老化も抑制することを見出した(Md. Imrul Kayes 修士論文³⁾)。

➤ 糖尿病治療薬と癌の研究

日本で糖尿病症例に対して多く処方されている DPP-4 阻害薬やメトホルミンの影響を担癌マウス・培養癌細胞で解析を進め、DPP-4 阻害薬において癌のオートファジー誘導に関連してアポトーシスが抑制されること、メトホルミンがそれを抑制する可能性を見出した(論文投稿中、日本糖尿病合併症学会⁴⁾、2023 年 5 月の日本糖尿病学会総会で発表)。糖尿病症例の最も多い死亡原因は癌であるため、長期服用が必要となる糖尿病治療薬が癌に及ぼす影響に関する解析は今後ますます重要となる。

<学会・発表論文など>

1. 日本糖尿病合併症学会 ワークショップ 25 周産期合併症に及ぼす HOMA-R の人種間差異 島根大学医学部附属病院 リハビリテーション部 /島根大学内科学講座内科学第一 伊藤郁子 他
2. 日本人とブラジル人における周産期合併症に及ぼす因子の人種間差異 (修士論文 伊藤郁子)
3. Investigation of the influence of cellular acidosis on kidney tubular cell senescence and the role of glutamine metabolism. (修士論文 Md. Imrul Kayes)

4. 日本糖尿病合併症学会 ワークショップ 8 DPP-4 阻害薬は mTOR/HIF-1 α 依存性 autophagy 誘導により乳癌細胞の生存に寄与する 島根大学 医学部 内科学講座 内科学 第一 川北恵美 他

◆ 内科学講座第二(消化器・肝臓内科)

➤ 消化器病に関する臨床的・基礎的な研究

消化器・肝臓内科では、胃腸、胆膵、肝臓に関する診療に携わっており、扱う疾患としては、腹痛や便秘異常などの日常的な症状を呈する疾患から難病まで多岐に渡っている。我々は、地域のニーズを満たせるように、消化器全般の診療と高度医療を推進し、地域住民の疾病予防や診療、病態解明を目指す研究を行っている。

2022 年度に論文発表した内容(主に消化管と肝臓)は、消化器病の疫学、診断や治療に関する臨床的な研究、疾患の病態解明を目標とした研究などであり、様々な視点から消化器病学の研究を行っている。

- 胃癌(腫瘍)の病態に関する研究(論文 1-4)
- 厚生労働省が指定する難病である炎症性腸疾患、好酸球性消化管障害(食物アレルギー)に関する研究(論文 5-7)
- 生活習慣病である非アルコール性脂肪性肝疾患に関する研究(論文 8)

<学会・発表論文など>

1. Shibagaki K, Itawaki A, Miyaoka Y, Kishimoto K, Takahashi Y, Kotani S, Mishiro T, Oshima N, Kawashima K, Ishimura N, Onuma H, Nagasaki M, Nagase M, Araki A, Kadota K, Kushima R, Ishihara S. Intestinal-type gastric dysplasia in *Helicobacter pylori*-naïve patients. *Virchows Arch* 480:783-792, 2022.
2. Mishiro T, Shibagaki K, Fukuyama C, Kataoka M, Notsu T, Yamashita N, Oka A, Nagase M, Araki A, Kawashima K, Ishimura N, Maruyama R, Kinoshita Y, Ishihara S. KLF4 Mutation Shapes Pathologic Characteristics of Foveolar-Type Gastric Adenoma in *Helicobacter pylori*-Naïve Patients. *Am J Pathol* ;192:1250-1258, 2022.
3. Sakamoto U, Adachi K, Kishi K, Okimoto E, Ishimura N, Miura H, Ishihara S. Prevalence of Raspberry-type Gastric Foveolar-type Tumor in Individuals Undergoing Medical Checkups. *Intern Med* 2023 Feb 22.
4. Adachi K, Kishi K, Sakamoto U, Ishimura N, Ishihara S. Degree of Gastric Mucosal Atrophy Correlated Well with Gastric Cancer Occurrence in Patients with *Helicobacter pylori*-eradicated Status. *Intern Med* 2022 Oct 5.
5. Cha N, Oshima N, Kishimoto K, Kotani S, Okimoto E, Yazaki T, Sonoyama H, Oka A, Mishima Y, Shibagaki K, Tobita H, Kawashima K, Ishimura N, Ishihara S. Long-lasting

renal dysfunction following tacrolimus induction therapy in ulcerative colitis patients. *J Clin Biochem Nutr* 70:297-303, 2022.

6. Nakase H, Wagatsuma K, Nojima M, Matsumoto T, Matsuura M, Iijima H, Matsuoka K, Ohmiya N, Ishihara S, Hirai F, Takeuchi K, Tamura S, Kinjo F, Ueno N, Naganuma M, Watanabe K, Moroi R, Nishimata N, Motoya S, Kurahara K, Takahashi S, Maemoto A, Sakuraba H, Saruta M, Tominaga K, Hisabe T, Tanaka H, Terai S, Hiraoka S, Takedomi H, Narimatsu K, Endo K, Nakamura M, Hisamatsu T. Anxiety and behavioral changes in Japanese patients with inflammatory bowel disease due to COVID-19 pandemic: a national survey. *J Gastroenterol* 58:205-216, 2023.
7. Okimoto E, Ishimura N, Adachi K, Kinoshita Y, Ishihara S, Tada T. Application of Convolutional Neural Networks for Diagnosis of Eosinophilic Esophagitis Based on Endoscopic Imaging. *J Clin Med* 11:2529. doi: 10.3390/jcm11092529.
8. Yazaki T, Tobita H, Sato S, Miyake T, Kataoka M, Ishihara S. Combinational elastography for assessment of liver fibrosis in patients with liver injury. *J Int Med Res* 2022. doi: 10.1177/03000605221100126.

◆ 内科学講座第三(脳神経内科)

➤ 脳血管障害、認知症、認知機能に関する研究

高齢化社会が進行する現代において、脳血管障害や認知症の罹患が生活の質の低下させており、健やかに高齢まで生活できる、いわゆる健康年齢を延伸させることを目的として、内科学第三では一貫して、地域医療に根ざした原因解明を目指した研究を継続しており、地域の方々の協力を得ながら予防医療発展を模索している。2022 年度の取組みについて報告する。

脳ドックでは、地域の健常な方を対象に経時的に受診を頂くことで、脳卒中のリスク因子の解析を行っている。発表論文 1 にあるように、これまで蓄積してきた脳ドック検査データ、MRI 画像データを元に、アンケート調査による経年的な追跡調査を加え、2365 名の受検者について脳卒中発症に寄与する因子を抽出し分析した。2001 年から 2021 年までの受検者を縦断的に脳卒中発症の有無を追跡した。脳卒中リスクファクターや頭部 MRI の無症候性脳病変と脳卒中の発症率を統計解析した。脳卒中の発症に有意に関係した年齢(>60 歳:A)、高血圧(P)、潜在性梗塞(S)、深部白質病変(W)、脳微小出血(M)の項目について加点をすることで SWAMP スコア(Silent brain infarction, White Matter Lesion, Age, Microbleeds, Pressure score)として、脳卒中発症率を検討した。虚血性脳卒中の経年的発症と SWAMP スコアを示すが、得点が高いほど脳卒中の発症が経年的に増加することが確認された(図 1)。

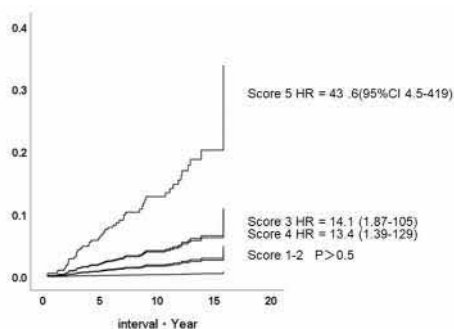


図1. SWAMPスコアによる虚血性脳卒中の累積ハザード値

また、脳梗塞の発症には動脈硬化が関与しているが、早期から発見することができれば予防にも有用と思われる。口腔内細菌や腸内細菌と脳梗塞発症に関連性があるかどうか脳ドック受検者で検証した。蒸留水を口に含んで唾液と共に採取した液を、次世代シーケンサーで 16S-RNA gene 解析により口腔内細菌叢を分析した。脳動脈硬化因子、頭部 MRI の虚血性変化と特定の細菌との関連性について統計解析した。脳ドック受検者 148 名で、MRI の無症候性脳梗塞(SBI)、大脳白質病変(DSWMH)、脳室周囲高信号(PVH)、脳微小出血(CMBs)を評価し、病変無し群と無症候性病変群(ABL)で細菌叢の構成の差を統計解析した。Fusobacterium と Leptotrichia の割合が ABL 群で優位に高く、その中でも F. nucleatum, F. naviforme, F. canifelinum との関連性が強くみられた。

その他、地域健診で得られたデータを元に健康推進を計るべく、研究に取り組んでいる。今回は高齢者で問題となる動脈硬化の因子について脈圧に注目して検討を加えた結果を論文2として報告した。また、認知症には脂質代謝異常との関連が推定されるため、当科では高次機能と関連するといわれるプラズマローゲンの測定法を開発し、今後、健診や脳ドックなどで測定して、認知症との関連性を検討していく予定である。

<学会・発表論文など>

1. Iwasa K, et al. Development of a stroke risk score with MRI asymptomatic brain lesions attributes to evaluate prognostic vascular events. *J Neurol Sci.* 2023;448:120642
2. Mizuhara R, Mitaki S, Takamura M, Abe S, Onoda K, Yamaguchi S, Nagai A: Pulse pressure is associated with cognitive performance in Japanese non-demented population: a cross-sectional study. *BMC Neurol* 2022, 22:137.
3. Zhou X, Sheikh AM, Matsumoto K, Mitaki S, Shibly AZ, Zhang Y, A Garu, Yano S, Nagai A: iTRAQ-Based Proteomic Analysis of APP Transgenic Mouse Urine Exosomes. *International Journal of Molecular Sciences*, 24:672, 2022
4. Haque MA, Omori N, Sheikh AM, Yano S, Osago H, Mitaki S, Azad AK, Sakai H, Michikawa M, Nagai A: Analysis of the time-dependent changes of phospholipids in the brain regions of a mouse model of Alzheimer's disease. *Brain Research*, 1800, 148197, 2023
5. Shibly AZ, Sheikh AM, Michikawa M, Tabassum S, Azad AK, Zhou X, Zhang Y, Yano S, Nagai A: Analysis of Cerebral Small Vessel Changes in AD Model Mice. *Biomedicines* 2022, 11.
6. Zhou X, Sheikh AM, Matsumoto KI, Mitaki S, Shibly AZ, Zhang Y, A G, Yano S, Nagai A: iTRAQ-Based Proteomic Analysis of APP Transgenic Mouse Urine Exosomes. *International journal of molecular sciences* 2022, 24.

島根大学医学部、出雲市乙立里家診療所及び出雲市全域における
地域コミュニティを活性化する医療人材の育成

成果報告書

一般社団法人Community Nurse Laboratory

2023年3月

<目次>

1. 活動成果のサマリー
2. 詳細報告
 - (1) 活動目的
 - (2) 活動期間
 - (3) 実施主体
 - (4) 活動内容
 - (5) 活動実績

1. 活動成果のサマリー

■活動目的とスコープ

一般社団法人Community Nurse Laboratory（以下、当法人）は、地域コミュニティを活性化する医療人材を育成することを主目的として、本年度より島根大学との協働を開始した。

活動1年目となる今年度は、以下2点をスコープとして実施した。

- | |
|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| <ul style="list-style-type: none">(1) 地域コミュニティを活性化する医療人材育成プログラムの企画・設計(2) 島根大学医学部生へのプログラムの提供及び調整 |
|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|

■活動内容

(1) においては、

- ・「医療者と患者」という関係性で出会う病院実習と比較して、**参加する医学生たちが「暮らしの中で、一人の住民として」住民に出会う経験**をすること（住民経験）

- ・コミュニティナースの活動現場に同行し、住民と関わりあう様子を観察した後、**自らも住民との会話を通じてつぶやき（真の願い）を拾うことに挑戦すること（アクティブリスニング）**

を基軸要素として、新たな人材育成プログラム（到達目標、身につけうるコンピテンシー、カリキュラム）を地域住民及び医学部と共同で設計した。

【プログラム到達目標】

- | |
|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| <ul style="list-style-type: none">①暮らしの中で1人の住民として地域の住民と出会い、関係を築くことができる。②住民のつぶやき（願い）を拾うことができる。③コミュニティナースが住民に提供している価値は何かについて自分の考えをもつことができる。 |
|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|

(2) においては、(1) で設計したプログラムにおいて、当法人の活動フィールドに島根大学医学部の学生を全7回、合計17名を受け入れ、コミュニティナーシングの体験・実践を行うことができた。

■活動成果と今後に向けた提言

○活動成果

参加学生のプレゼンテーションと振り返り、医学部担当教授との振り返りを通じて、参加した17名全員が到達目標を達成することができた。

参加学生にとって最大の学習ポイントの一つは、住民（患者）の（病院に来る前の、または退院したあとに戻っていく）日常の暮らしを想像できるようになったことだと考えられる。

本カリキュラムには、学生がこれまでに経験したことがない地域内の自主活動（例えば、庭の剪定や雪かき等）に住民と共に取り組み、会話を通じてその人のつづやき（願いやニーズ）を拾う機会を多く設計している。

「なぜこの住民さんは（仕事でも、誰かに頼まれたわけでもない）雪かきをしているのか？」会話の中でそうした疑問を抱き、その人の暮らしに目を向けてみると、その人が望む生活を送るために、どんな思いで何を大切に暮らしているかが見えてくる。そうした想像力が湧いてきたことが大きな成果であるとプレゼンテーションで語る学生が多くみられた。

そのほか、参加学生からのコメントから見える学習・成長のポイントとしては以下が挙げられる。

- ・住民への声の掛け方やふるまい方
- ・アクティブリスニング（能動的に聴く）の実践方法
- ・住民が本音を話しやすい場づくり
- ・医療者ではない人を地域活動に巻き込んでいくことの重要性

○今後に向けた提言

医学部救急科の医学生によるプログラム受け入れは、次年度も継続予定である。本年度のトライアルから見えた、次年度への改善ポイントを記載する。

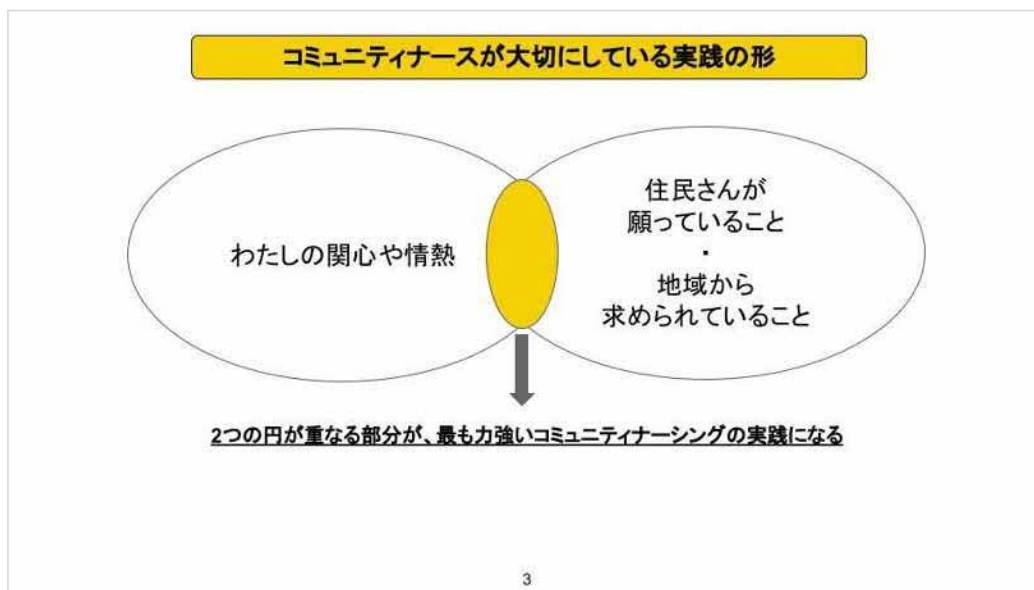
・より主体的に参加する姿勢のセッティング

参加学生が実習を「受ける」という姿勢ではなく「学びを掴んでいく」というマインドを持ちやすいように、オンラインでの事前オリエンテーション（2023年1月より開始）やDAY1の導入、毎日のふりかえりの方法を改善する。

例えば、実習中に出会う「住民と会話する」という何気ない行為ひとつからも、その会話から何を学びとっていかうか、どう病院での患者さんとの会話に応用しうるかの学びのポイントを自ら探していけるような姿勢・マインドを携えてプログラムをスタートできるような工夫が必要である。

・「自分らしいナーシング」を試す時間の導入

『義務感や使命感からではなく、自分のやりたいことを原動力にいろいろなことチャレンジしてみたい。』という今回の参加学生のコメントからもみられる通り、規定されたコミュニティナーシングを学ぶのではなく、自らそれを作り出す実践機会をカリキュラムに導入していく。具体的には、「わたしの関心や情熱」と「地域に求められていること」の接点から自分らしいコミュニティナーシングのあり方を見つけていく（下図参照）を実践する機会が必要である。



・よりライトなプログラムの設計による参加者層の拡大

現在の4日間・フルタイムのプログラムだと、月に1回の開催、1回あたりの受け入れ人数は最大3～4名が限度となる。「暮らしの中で、一住民として出会う体験」をより多くの学生に体験してもらうためには、医学部のカリキュラムや学生の可処分時間も踏まえた上での、よりライトな学習機会の設計が望まれる。

2. 詳細報告

(1) 活動目的

本活動では、大学生を中心とした若者世代を対象として、地域コミュニティを活性化させる医療人材を育成することを目的とする。

(参考：全体構想「地域まるごとキャンパス」)



(2) 活動期間

2022年6月1日～2023年3月31日

(3) 実施主体

一般社団法人Community Nurse Laboratory (代表：矢田明子)

(4) 活動内容

- (1) 地域コミュニティを活性化させる医療人材育成プログラムの企画・設計
- (2) 鳥根大学医学部生へのプログラムの提供及び調整

(5) 活動実績

(1) 地域コミュニティを活性化する医療人材育成プログラムの企画・設計

■プログラム概要

コミュニティナースの現場でのフィールドワーク・実践を通じた人材育成

■コンセプト

- ・「医療者と患者」という関係性で出会う病院実習と比較して、参加する医学生たちが「暮らしの中で、一人の住民として」地域住民に出会う経験をする
- ・コミュニティナースの現場に同行し、住民と関わりあう様子を観察して多角的な学び・視点を得て、また自らも住民とのコミュニケーションを実践すること

■実施場所

島根県出雲市、雲南市

■期間

4日間（住民調整の都合により変動あり）

■プログラム到達目標

- ①暮らしの中で1人の住民として地域の住民と出会い、関係を築くことができる。
- ②住民のつぶやき（願い）を拾うことができる。
- ③コミュニティナースが住民に提供している価値は何かについて自分の考えをもつことができる。

■身につけるコンピテンシー（具体的な行動に繋がる考え方や価値観、動機）

- a “信頼できる、身近なあの人”になる関係づくり
- b 住民の好きなこと・生きがいをアクティブに聴く力
- c その人の「いつもと違う」にいち早く気づける観察力
- d 仲間を巻き込んでその人の願いを叶えるコーディネート力

■カリキュラム（ある月の例）

日程	実施内容
事後オリエンテーション （オンライン）	<ul style="list-style-type: none"> ・顔合わせ ・コミュニティナースとは？ ・実習の趣旨説明
DAY1	AM <ul style="list-style-type: none"> ・コミュニティナースのコンピテンシー・マインドセット説明 PM <ul style="list-style-type: none"> ・「おせっかい会議」の説明 ・八日市同行 ・コミュニティナースとのふりかえり
DAY2	AM <ul style="list-style-type: none"> ・古城キーパーソンしげるさん ・みんなのお家の剪定、お父さんのお話聞く ・小屋をわくわく想像できる場所にする PM <ul style="list-style-type: none"> ・白名さん訪問 ・三沢のパッチアダムスとバルーンアートを楽しむ ・コミュニティナースとのふりかえり
DAY3	AM <ul style="list-style-type: none"> ・「おせっかい会議」案件訪問 ・食のコンソーシアムくみさん訪問 ・コミュニティ財団村上さん訪問 PM <ul style="list-style-type: none"> ・「ナスくる」訪問同行 ・三刀屋郵便局訪問 ・古山さん訪問 ・コミュニティナースとのふりかえり
DAY4	<ul style="list-style-type: none"> ・住民さん及びコミュニティナースを交えた最終発表

(2) 島根大学医学部生へのプログラムの提供及び調整

■活動実績

	日程	人数	実施内容
1	6月13日～17日	2名	・オリエンテーション ・コミュニティナース現場体験 ・コミュニティナース実践 ・学びの共有（プレゼンテーション）
2	7月19日～22日	1名	同上
3	8月29日～9月2日	1名	同上
4	10月17日～21日	1名	同上
5	1月30日～2月2日	3名	同上
6	2月20日～23日	3名	同上
7	3月20日～24日	4名	同上
合計		17名	



多世代交流拠点ほほえみで複数の地域住民へのコミュニティナース実践風景



スーパーで買い物客へヒアリングと実践の学びの報告風景



住民の一員として地域住民に暮らしや文化について教わる風景

■参加学生からの気づき・学びのコメント（匿名での抜粋）

<地域住民と関係構築をするための気づき・学び>

・郵便局でのまちの保健室で、宮本さんが住民の方に「いつもありがとうございます。」とか、「この前お会いしましたよね!」と話しかけていた。お互いがお互いを認識している関係になるために、ちょっとした声掛けがとても重要だと感じた。

・自分が実際に骨密度を測定したり姿勢をみてもらったりしたときに、気づいていなかった体の良くない点がわかり、アドバイスを頂けると、そのアドバイスが日頃から良く目にする言葉であったのに、今日は自分事として受け止められたのが印象的だった。このような活動で住民の方もいち早く自分の体の異変に気づけるのではないかと感じた。

・自分が思う「正しい」を住民さんに押し付けるのではなく、相手が何を求めているのかを汲み取り（アクティブリスニング）、それに応えていくことが一番大切なことだと学べた。

・各測定所で測定を始める前に、今気になっていることや気になっている健康問題にチェックを入れるタイミングが用意されており、自分自身、体験中について自分が不安になっていることや抱えている健康問題を語っていることに気がついた。このように、人に話す機会がないために心の中で抱えている問題について住民が自然に語り出しやすい場を提供しているのではないかと感じたし、その問題について安心を与える言葉を投げかけたり、受診が必要な場合にはそれが問題であることを自覚させ一緒に問題を共有していくような声かけをしていると感じた。

・普段は落語家で看護師もやっている方や、病院に行く前にできる民間療法を広めたい方など、病院の中から医療者が出ているというよりも、医療者と住民双方の属性を持ったような立場の人が主催者側に多いと感じた。

・住民の方が症状について話している際、自分はいづい鑑別疾患を考えた上で、かかっている病院の診療科を把握し、その人に必要な医療的な介入は何か、どんな疾患の精査や加療が必要か、といったことについて自然と考えてしまった。口渇、浮腫、視力低下、網膜剥離・出血、末梢神経障害といった用語に無意識に頭の中で置

き換えをし、血糖コントロールは大丈夫だろうか、と考えてしまい、どうしても医療者と患者さんとしての関わり方を頭の中でしかけていると気づいた。

<自身の姿勢・キャリアに対する気づき>

・実習を通じて、暮らしのことにまで想像力が及ぶと、患者さんにとって最適な医療が提供できるのではないかと実感することができた。本当にこれでいいのか？を常に問い続ける姿勢ができた。

・住民の方への挨拶や話しかけ方、表情や仕草を考えて、親しみやすいけれど失礼ではない距離感を作りたい。義務感や使命感からではなく、自分のやりたいことを原動力にいろいろなことにチャレンジしてみたい。

・外来だと患者さんに聞くべきことが大体決まっていて、小さな訴えを聞き逃しがちなこともあるため、時間の許す限り日常生活で困っていることはないかなど、患者さんの生活に寄り添える医師になりたいと思う。

・病院では患者さん、地域では近所の住民の方に対して、話し方や動きをよく観察し、その人のウェルビーイングを理解したり、「いつもと違う」に気づけたりする医師もしくは身近な近所の人になる。



〒693-8501
島根県出雲市塩冶町89-1
島根大学医学部 内科学第二